

2023 年 (令和 5 年)
2 月号 (No. 933)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

第 2 回 GHT 踏査レポート〈上〉ルンバサンバ峠を越えマカルーBCへ …… 1
 マナスルとアマ・ダブラム ファスト・マウンテニアリング報告 …… 4
 「引き継がれる山岳祭」プロジェクトがスタート …… 6
 不定期連載 ■ 最新海外山岳会事情 ② …… 7
 追悼 登山人生を味わい尽くしたぶーちゃんに乾杯 …… 8
 連載 ■ ご当地アルプス登山案内
 ⑦ 播磨アルプス …… 9
 ⑧ 新龍アルプス …… 10
 東西南北 …… 12
 支部だより
 東京多摩支部／宮崎支部 …… 13
 図書紹介 …… 15
 新入会員 …… 16
 図書受入報告 …… 16
 会務報告 …… 18
 ルーム日誌 …… 18
 会員異動 …… 18
 INFORMATION …… 18
 編集後記 …… 19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第 2、第 4 土曜日 …… 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 …… 10~18時

第 2 回 GHT 踏査レポート〈上〉 ルンバサンバ峠を越えマカルーBCへ

吉井 修

2020 年春に実施した第 1 回グレート・ヒマラヤ・トラバース (GHT) から 2 年、春・秋 4 回の機会をコロナ禍で見送ったが、昨年秋、10 月 1 日〜11 月 26 日の期間で、ようやく第 2 回 G・H・T を実行に移すことができた。ネパール東部山域からクーンブ・ヒマールへ、その山旅を 2 回にわたって報告してもらおう。

西堀さんの言葉に背中を押されて
私は第 1 回 GHT の直前、2019 年の年末まで銀行員であった。重廣恒夫さん、松田宏也さんとヒマラヤに行くと言うと、「あなたは何者ですか」とよく聞かれた。銀行員としてはよく山に登ってきたのだから、仲間とともに一般路を歩く、山好きのサラリーマンであった。

GHT に参加するのに不安がないはずがない。ただ、仕事の上でもその著書からたくさんの示唆を受けてきた西堀榮三郎さんの文章に「……とにかく、強い願いを持ち続けていれば、降って湧いたようにチャンスがやってくるものです。その時、取り越し苦労などしないで、躊躇なく勇敢に実行を決意することです」というのがある。まさに降って湧いたように重廣さんか

ら GHT の計画を聞いたとき、58 歳とまだ早かったが、思い切って会社を辞める決意をした。

第 1 回 GHT では、長期間ヒマラヤを歩き、未踏峰、ブクカン(6244m)を直指するという、自分にとって全く未知の挑戦があった。今回の第 2 回 GHT には、5500m 以上でおよそ 1 週間行動し、「スリー・コル」と呼ばれるシェルパニ・コル(6180m)、ウエス・コル(6190m)、アンプ・ラプツァ(5845m)を越えるという、これまた初体験のことがある。自分にとって初めてのことは、やはり不安と躊躇が付きまとう。今回もまた、西堀さんの言葉に背中を押されての出発であった。

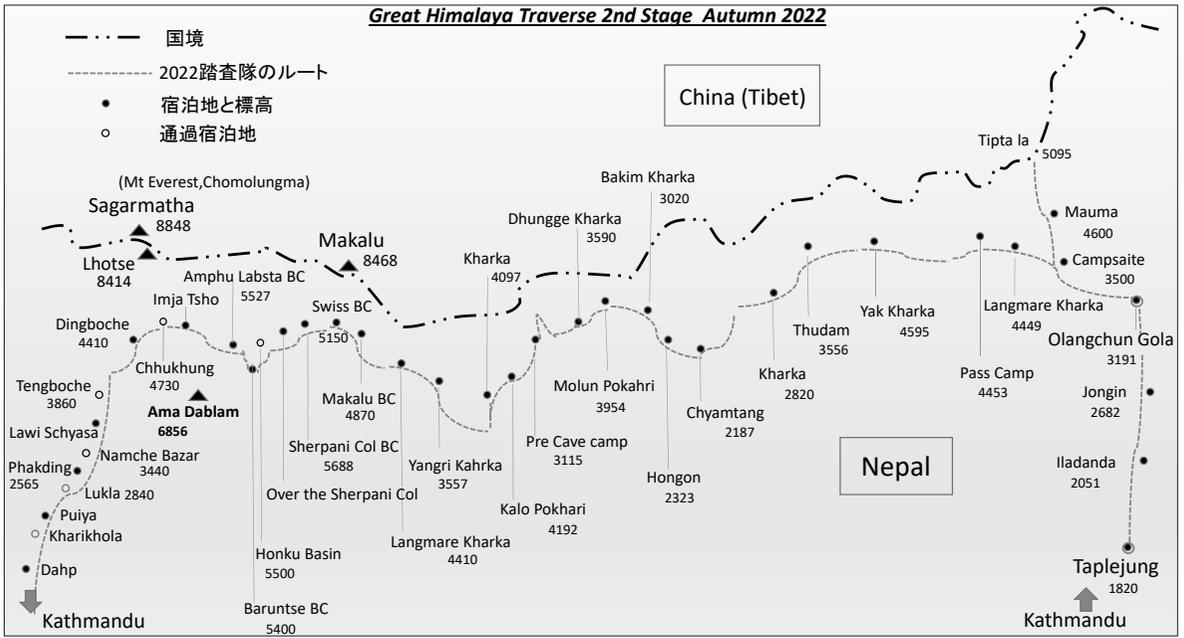
3月9日イラダング〜10日ジョン

ギン〜11日オランチュン・ゴラ
〜12日(同地休養)

今回の隊は重廣隊長(74歳)、藤井正善さん(75歳)、丸尾祐治さん(77歳)、私(61歳)の 4 人。10 月 1 日にネパール航空の直行便でカトマンズ入り。ダサイン(ネパールで最大の祭り)の影響で当初の予定より 1 日遅れて、7 日にタプレジユン着。9 日、ジープで前回も帰路に走った悪路をイラダングの手前まで入り、15 時 50 分から今回の第一歩を踏み出した。イラダングまでは 2 時間ばかりだが、雨に降られた上に日没、ヒルにも襲われて、前途多難の出発であった。

11 日にオランチュン・ゴラ(3191m)着。ここまでは前回通った道で、前回と同じバツティ(茶店)に宿泊。この日は重廣隊長

Great Himalaya Traverse 2nd Stage Autumn 2022



の75歳の誕生日で、このよ
うな山中にも
かかわらず、
ガイドたちが
粹な計らいで
ペースディ・
ケーキを作り、
皆でお祝いし
た。翌12日は
休養日。午
後、487年
前の建立とい
うゴンパ(寺
院)を訪ねた
が、後は終日
雨が降ったり
やんだり。村
から見える山
の上は、雪で
白くなってい
る。ここから
いよいよ西へ、
前回の続きの
GHTルート
を歩むことに
なる。悪天だ
と辛い。モン
スーン明けは
いつだろう。

13日キャンプサイト〜14日マウマ
〜15日マウマ〜ティプタ・ラ手前
往復〜16日キャンプサイト

天気を気にしていたが、13日の朝は青い空、快晴になった。村を抜けるともう通信はつながらない。タムール川沿いのよく踏まれた道をキャンプサイト(3500m)へ。ここで1泊し、ここからいったんGHTのルートを外れて北へ、ティプタ・ラ(5095m)往復を目指した。ティプタ・ラは西本願寺派の僧侶であった青木文教が1912年、チベットに入る際に越えた峠である。

計画ではティプタ・ラに1泊する予定であったが、コロナの影響で国境は閉鎖、今は峠まで行けないという。3930mのマウマに2泊、そこから行ける所までピストンすることにした。行く道はチベット側から下りて来ている車道だが、現在、車両は通っていない。15日は8時前に出発、13時40分まで登ったが、ティプタ・ラの手前直線距離にして800m余りの所で折り返した。峠に達することができなかつたが、4000mを越えて丸一日の行動は、高度順化には効果があったと思われる。



10月19日、前半の山場であるルンバサンバ峠を越える

17日ランマレ・カルカ〜18日パス・キャンプ〜19日ルンバサンバ峠越え〜ヤク・カルカ〜20日トウダム

16日にキャンプサイトに戻り、翌17日、3500mのキャンプサイトからランマレ・カルカへ、GHTルートをルンバサンバ峠へ向かう。18日、パス・キャンプ(4595m)へと次第に高度を上げた。振り返ると登って来たディンサンバ・コーラの谷が雄大だ。

19日はいよいよ前半戦の山場、5159mのルンバサンバ峠越えだ。南西方向に雪が残る斜面を登って行く。右手にディンサンバ・



ルンバサンバ峠の登りから見た、左からカンチェンジュンガ、クンバカルナ、カプルー

コーラの広大なモレーンを見送り、左手後ろ、東の方を見ると白い山が連なる。おおつ、カンチェンジュンガとクンバカルナ(ジャヌー)だ！さすが、ひときわすばらしい。11時、ルンバサンバ峠。峠は一面の雪であったが、堅雪にうつすらと新雪の状態で助かった。峠を辞し4595mのヤク・カルカまで高度を下げてテント泊。

翌20日朝、昨夕は雲で見えなかったが、西の方、見下ろす谷の向こうに白い山が見える。なんとマカルーではないか！三角形の美しい姿、向かって右側、東稜が頂上に突き上げている。1995年、重慶隊長率いる日本山岳隊が挑

んだ尾根だ。長大な稜線が見えるが、それでも東稜の一部しか見えていないとのこと。

この日はひたすら下り、3556mのトゥダム村の前を流れる川の対岸にテント泊。8日ぶりの人里は、民家は10軒ばかり。ポーターたちが泊まる家を訪ね、村の話聞いた。

21日カルカ〜22日チャムタン〜23日ホンゴン〜24日(同地休養)

21日は途中から谷を離れて、谷底をはるか下に見下ろしながら山腹を縫っていく。トゥダムで訪問した家のおばさんが隊についてきて、小屋を開け、ポーター向けに



10月20日朝、待望のマカルーが見えた。中央手前が重慶隊長らが登った東稜。右はチョモ・レンゾ

営業、隊員はその横にテント泊。22日も山腹を縫いつつ下降、昼前にアルン川の豪流を吊り橋で渡り、15時ごろチャムタンの村に入った。ここからホンゴンまでは村々を縫って進む。今回のルート中では最も標高の低い部分。

ネパール語が堪能な丸尾さんに村人が話し掛けてきたが、「こんな爺さんたちで、よくも山を越えて来たな。まだ先に進むのか」と言っているとのこと。年齢を聴かれるとそれも当然、苦笑するしかない。23日ホンゴン着、24日は12日ぶりの休養日。洗濯と村の長老に話を聞きに行った以外は、ゆっくり過ごした。夕刻、ドイツ人女性2人が到着。なんと2020年にカンパチエンで会った2人。コロナ禍の時を経て、よく似た者同士の奇遇に驚いた。

25日バツキム・カルカ〜26日モルン・ポカリ〜27日ドウンゲ・カルカ〜28日ケーブ・キャンブ手前〜29日カロ・ポカリ〜30日カルカ〜31日ヤングリ・カルカ〜11月1日(同地休養)

ホンゴンとヤングリ・カルカには、南のヌムからそれぞれ道が通

じている。ルンバサンバ峠を越えたトレッカーは、ホンゴンからヌムに下る。マカルーBCを目指す人は通常、ヌムからヤングリ・カルカに入る。それ故この間のGH Tルートを歩く人は少ないようだ。この間は山を越え、谷に下っては登るの繰り返し。これがなかなかのスケールでやってきて、これぞ僻遠のロングトレイルという様相。ルートが不明瞭な所もあったし、橋が流れて、数時間に及ぶ迂回を強いられた所もあった。

31日にバルン溪谷まで出ると、対岸にヌムから北西に上がって来ているのがマカルー街道で、そこらはよく踏まれた道。その道と合流して間もなく、ヤングリ・カルカに到着した。

計画では、マカルーBCでタブレジュンのポーターを解雇する予定だったが、2日早めて、ここで解雇することに。彼らはカトマンズに戻るポーター2人と不要になった荷物を運んで、マカルー街道を下る。11月1日は装備の仕分けと賃金・ポーターの支払い。明日からは、カトマンズからの7人と隊員4名の態勢で進む。2日後にはマカルーBCである。

REPORT

マナスルとアマ・ダブラム
ファスト・マウンテニアリング報告

山田利行

アマ・ダブラム南西稜を
レコードタイムで往復

マナスルでの鬱憤を晴らすかのような、爽快な朝だった。10月22日、午前9時42分、私はアマ・ダブラム（6812m）の頂上に立った。ベースキャンプを4時きっかりに出発し、ほかのパーティをごぼう抜きにして、5時間42分で標高差2300mを登ったのだ。

軽量化のためC2から上は水も持たず、着のみのまま、ヘッドランプとジェル2つ、カラビナ2枚だけで登り続けた。BCの喧騒

とは違い、頂上には私1人だった。東海支部のローツエ南壁、マカルー西壁、カンテガ北壁、タウツェ東壁と、360度のパノラマがそこには広がっていた。

喜びに浸る間もなく、記録のために頂上での自撮りを済ませるとさっさと下山を始めた。登りのC3（6400m）あたりから高度障害がはじめていたが、時間の経過とともに、下山ではそれがより顕著になっていった。明らかに脳への酸素供給が足らず、体がふらついた。C2を過ぎて、徐々に足の筋

いてくれるではないか！ 記録用に動画を撮影してくれている。BCで大田さんのひと言「トシ君のチャレンジに感動したよ」に仲間の温かさを感じ、自分のチャレンジを誇らしく思った。

頂は遙なり・マナスル敗退記

モンソンの影響で、カトマンズに着いてから2週間以上悪天が続いていた。マナスルでC3（6700m）までの2回目の高所順応を終えた私は、予定のC4までの高度順応ができず、悶々とした気持ちでBCの仲間たちと天気予報を見ていた。いつモンソンが明けるのか。私がジョインしていたのは昨年、K2の冬季初登に成功したミンマGが経営する、イマジネパールだった。

どうやら25日以降にモンソンが明け始め、天候が回復してくるという話になった。28日を頂上アタックの日に設定した。26日にBCでのんびりしていると、突然ラジオが騒がしく鳴り出した。C3とC4の間で雪崩が発生し、十数人のシェルパたちが雪崩に巻き込まれた。しかし翌日、彼らは予定どおりサミット・プッシュに出か

けることを決定していた。私もその状況をBCで聞きながら、27日夕方6時15分、C4を目標に調子が良ければ行ける所まで行こうと決める。あたりが暗くなり始めたころ、BCを出発した。

2回目の順応の後、体調を崩してしまっていた。共同生活での自分の体調管理の難しさを感じた。数日間、完全に休養し、BCを出たときには調子は悪くなかったが、歩き出して1時間もすると、冷たい空気を吸っていたためか猛烈にのどが痛くなってきた。ときおり発作のような咳も出る。痛くて唾を飲み込むのも辛い。なんとかなると言い聞かせてC3を目指す。



アマ・ダブラム頂上から見たエベレストとローツェ（左）。右奥はマカルー



アマ・ダブラムC2から見上げた、頂上へと続く南西稜の岩稜

肉が酸素不足で動かなくなってきた。太ももが上がらない。ガレ道に足を取られながら走り続けた。ゴールであるBCが眼前に迫る。なんと広島隊の大田さんが、マラソンの応援のようにトレイルに



マナスルBCに出現した一大テント村

予定どおり標高差1900mを6時間半の好タイムで登り、C3に到着した。私の作戦ではC3にデポしたダウンスーツに着替え、暖かいお湯を補給する。これが軽い休憩にもなる。C3からC4までは斜度30度の雪の斜面が700mも続く、教科書どおりの雪崩斜面である。昨日雪崩たばかりだから、今日は大丈夫だと判断する。

数百m登った所で風が猛烈に強くなってきた。予報よりも明らかに強い風だった。目も開けられなくなり、ゴーグルを着ける。さらに進むが、今度は巻き荒れる風が顔にまわり付き、呼吸ができなくなってしまう。「体力を節約



マナスルC1から見上げたC2へのルート。左上は頂上手前のピナクル

し、次回に懸けるべきではないのか？」その場に座り込み、考えを巡らせる。「次のトライに全力を懸けよう」そう決心して下山を開始した。このときの標高が6850m。ここが私の最高到達点であった。

数日の休養を得て、10月1日、再度C3に入る。天候は相変わらず不安定で、天候が良くても風が強い日が続いていた。すでにワンデイでの登頂は諦めており、C3で停滞してでも頂上を目指し、単なる無酸素登頂に目的を変えた。

しかし、2日にC1とC2の間で雪崩が起き、シェルパ1人が遭難。さらに追い打ちをかけるよう

にBCにも雪崩が襲い、私たちのテントも潰されたらしい。それでも諦めきれなかった。まだ本当の頂上すら見ていないのだ。私は翌日まで停滞を決めた。

翌日、外は快晴であったが、雪煙を上げるマナスルを見上げて、私の気持ちは完全に折られてしまった。「もう十分だ。一刻も早くこの山から離れたい」。テントを撤収し、BCへと下山した。

マナスルからアマ・ダブラムへ

マナスルでの高所順応を活かすことはできないか。ファスト・マウンテナリングの条件に合う山として、アマ・ダブラムとプモリの選択肢があった。どちらも公募登山隊が入るためルート工作ができること、標高も私の順応で対応できること、ジョイント・パーティットを使って費用を安く抑えられること、エベレスト街道は旧知であること、などだ。

すぐに高橋東海支部長に連絡し、私の想いを伝えた。「広島隊の計画の邪魔にならないようにやれるなら、いいんじゃないか」と賛同していたのだ。

ところで、今回の計画の名称と

なっている「ファスト・マウンテナリング」とは、私が便宜上作ったものである。日本語に直訳すると「速攻登山」という意味である。整備された登山道を守るトレイル・ランニングとは違い、私のファスト・マウンテナリングは氷河、岩稜、雪壁など、山に存在するあらゆる地形を1秒でも早く登り、頂上に立つことを目的にしている。

アマ・ダブラムをBCから見上げたとき、この山を10時間以内で往復できると、どれだけの人が想像できるだろうか。数字では表わすことのできない、冒険的な登山も大好きだが、それと同時に、クライマーとしての能力も追求していきたいとの思いが、今回のチャレンジの根底にあったのである。

【登山メモ】マナスル（ノーマルルート）9月3日～10月3日、6850mまで、シェルパ・レスアマ・ダブラム（南西稜ノーマルルート）10月10日～28日、BC（頂上）5時間42分、BC（山頂）BC（9時間32分）レコード・タイム）シェルパおよびポーター・レス。

（東海支部会員）

（この登山は、本会の海外登山助成を受けて実施されました）

創立120周年記念事業

「引き継がれる山岳祭」プロジェクトがスタート

皆さん、日本山岳会が関わる山岳祭がいくつあるか、ご存じですか？ また、その山岳祭に行ったことはありますか？

昨年、創立120周年記念事業の一つとして、各地で開かれている山岳祭を絶やさず将来につなげるために、「引き継がれる山岳祭」と称して新たなプロジェクトを立ち上げました。山岳祭は支部にとっては重要なメインイベントであり、山岳伝統文化を絶やさず、先



選ってきたウェストン・レリーフの前で、復元を喜ぶ本会会員たち(昭和22年6月14日)

PJリーダー 坂井広志

人の精神を受け継いでいこうという熱意ある会員たちによって継続されております。

今回、プロジェクトでは各地で開催されているこれら山岳祭を「継続」「支援」「広報」「交流」をキーワードとし、途切れることなく盛り上げ、受け継いでいこうということになりました。

以下のリストは、主な山岳祭を開催回数が多い順に並べ、今年の開催予定日を記しました。

- ◇ウェストン祭(本部主催、信濃支部主管)・・・開催回数77回、2023年6月3日(土)～4日(日)
- ◇高頭祭(越後支部主催)・・・開催回数66回／7月25日(火)
- ◇木暮祭(山梨支部が運営事務局)・・・開催回数64回／10月15日(日)
- ◇深田祭(山梨支部は実行委員)・・・開催回数42回／4月16日(日)
- ◇宮崎ウェストン祭(宮崎支部共催)・・・開催回数38回／11月3日(金)
- ◇播磨祭(富山支部主催)・・・開催回数38回／6月4日(日)

◇泰澄祭(福井支部主催)・・・開催回数35回／5月28日(日)

◇藤木祭(関西支部共催)・・・開催回数31回／開催日未定

◇久弥祭(石川支部が実行委員)・・・開催回数27回／10月22日(日)

◇小島烏水祭(本部主催、四国支部主管)・・・開催回数11回／4月8日(土)

◇横有恒碑前祭(北九州支部主催)・・・開催回数7回／10月29日(日)

◇田部祭(山梨支部後援)・・・開催回数6回／開催日未定

このうちウェストン祭と小島烏水祭の2つは、本部主催・支部主管という位置付けとなっています。人物顕彰に限らなければ、これら以外にもいくつか山岳イベントは各地にあります。今回の「引き継がれる山岳祭」プロジェクトチームの構成は本部より5名、山岳祭に関連する支部からは群馬、越後、富山、石川、福井、山梨、信濃、四国、北九州、宮崎と10支部が加わっていたら、お互い連携を取り合いながら、山岳祭を盛り上げる企画を始めることとなりました。

本会の歴史を振り返ってみましょう。最も長く開催されてきているウェストン祭は、第2次世界大戦が終わり、各地で戦災の傷跡が

残る厳しいなか、昭和22(1947)年6月14日、上高地で第1回が開催されました。写真に写っているウェストン碑は、戦時中に国内で巻き起こった金属供出運動から守るべく会員たちが決死の思いで取り外し、隠してきたレリーフでした。東京大空襲でレリーフの一部が壊れましたが、この日めでたく復元され、山の空気に触れ、岳人たちに披露されました。

ウェストン祭をはじめ各地の山岳祭は全て、戦後の昭和、平成の時代にスタートしています。私たちは幸いにも平和な時代を過ごしてきました。この平和を願いつつ、世代を超えて響き合い、継承されてきた日本山岳会の山岳祭を今後も引き継いでいかなくはならな

いと考えます。

このたび昨年12月の理事会で、各地の支部が主催側として関わる山岳祭には、わずかですが補助金を出すことを決定いたしました。私たちは継続される各地の山岳祭を今後もよく知り、先人を顕彰していきたいものです。そして、コロナ禍で停滞した会員同士の交流の場として、ぜひ皆さんに参加していただきたいと思います。

不定期連載■最新海外山岳会事情②

英国山岳会前会長にインタビュ

国際委員会 和田 薫

2022年7月号では、英国山岳会(Alpine Club、以下AC)の最新の会員構成や取り組みなどについて、事務局へのヒアリングを基に、データを交えて紹介した。今回は、20年からACの会長を務めたビクター・サンダースにインタビューを行なったので、その人となりやクライミングへの考え方について紹介したい。なお、23年1月現在、ビクターはAC会長の任期を終え、後任のサイモン・リチャードソンにバトンを渡している。



ビクター・サンダース(左)と元AC会長のリンゼイ・グロフィン(撮影=ピオトル・ドロルトズ)

英国人であるビクターは、1987年のスペインテイク峰(7027m)のゴールデンピラー初登攀をはじめ、多くの初登攀記録を持ち、エベレストにも6回登頂している。

現在はフランスのシャモニの近くに住み、73歳になった今も精力的に海外の山を登り続けている。21年には、パキスタンの山、プレガ(6185m)南壁を17時間行動の末、初登頂した。今年もK2に登る予定だという。



今後のクライミング界について話し合うビクター・サンダース(左)とスロベニアのシルヴォ・カロ(2022ビオレドール生涯功労賞受賞者)

優れた文筆家としても知られていることも付け加えたい。1991年に著作で「ボードマン・タスカール山岳文学賞」を受賞しており、21年にも著作を出版したばかりだ。華やかな登山歴もさることながら、積極的に国内外や若いクライマーとも交流を広げ、親しみやすい人柄とユーモアも相まって、多くのクライマーに尊敬されている。

ガントな登攀ラインに魅了された。そして、そこに、ロープの先に結ばれた仲間との絆が大事なものと加わりました。このクライミングで築いた仲間たちこそが、私にとって、時を経るにつれてより重要なものになっていきました。

以下は、ビクターへのインタビューである。

——ACの会長として、どのような点に注力してきましたか？
前回、事務局に尋ねたときは、若者や女性クライマーの育成に取り組んでいると聞きました。

——若いときに日本に來られたことがあると聞きました。どうして来日されたのですか？

ACは、ご承知のとおり、登山に対する情熱を共有している人たちの集まりです。ですから私は、こうした情熱の共有という感覚を認め、それを育て、会の中心のテーマに据えるということに取り組みました。

私は、昨年91歳で逝去した、世界的にも著名な建築家である磯崎新氏のインターンとして来日しました。私は44歳のときに山岳ガイドに転向しましたが、それまでは建築家だったんです。当時は残念ながら日本の山は登りませんでした。が、そばや餃子といった食べ物が美味しかったのを覚えています。

——現在も新ルートを開拓し続けていますね。そのモチベーションはどこから湧いてくるのでしょうか。
いい質問ですね。私が最初に登山を始めたときは、その形とエレ

——現在も新ルートを開拓し続けていますね。そのモチベーションはどこから湧いてくるのでしょうか。

——ACの会長として、過去の遠征記録の情報提供などを通じて、ACに協力していきたいと考えている。

(国際委員会委員長)

追

OBITUARY

悼



登山人生を味わい尽くした ぶーちゃんに乾杯

鴨原洋子

小倉董子のぶこさんが亡くなった。ひとり息子で本会会員の浩嗣さんから知らせを受け、ともに歩んだ長い年月が私の中を駆け巡った。董子さん、愛称「ぶーちゃん」とは早稲田大学山岳部先輩としての出会いだっただが、当時は、こんなにも長く縁が結ばれると思っていなかった。

当時、女子を受け入れた大学山岳部はほとんどなかった。監督の



小倉董子(おぐら・のぶこ)

会員番号3908 永年会員
1932年 山形市生まれ。父親は本会元山形支部長だった後藤幹次
1951年 早稲田大学文学部入学。山岳部初の女性部員
1957年 赤道アフリカ遠征隊に参加してキリマンジャロ登頂
1961年 佐藤テル隊長以下女性ばかり5人でニューゼaland親善登山。以後、南米縦断など世界各地を探訪
1975年 朝日カルチャーセンター女性登山教室講師。修了者による「紫蘭会」を立ち上げる
著書に「女性登山ガイド」「生涯楽しめる山歩き山登り」などがある

関根吉郎先生の提案で、ぶーちゃんは女子部員第1号となった。当時反対の声もあったと聞くが、彼女の父上も創部期の先輩部員であり、数少ない二代目となる。また、関根先生の「これからは男女共存」という強い主張も相まって女子部員誕生となったと思う。

卒業後も『婦人画報』編集部という激務のなか、よく現役の我々に付き合ひ、ぶーちゃんならではの指導をしてくださった。彼女の山形訛りは、キツイ小言も突き刺さることなく、じんわり沁みるものだった。

1957年、関根先生発起の「早大赤道アフリカ遠征隊」に参加、キリマンジャロに登頂した。これははじめとして、4年後のニューゼaland、1974年南米アドベンチャードライブ、1978年サハラ・東欧アドベンチャードライブと、海外での活躍が始まる。

私事になるが、卒業後早々に山岳部先輩の鴨原啓佑と結婚して子育て中だった私には、まぶしく輝く先輩の姿であった。ところがである、ある日、鴨原の後輩で私の先輩の小倉茂暉さんが我が家に来て、話のついでのように「結婚しようと思う」と言うので「誰?」と聞くと、相手はぶーちゃんではないか!

そのとき彼女は遠征の帰り船の中。夫と私は早速プロポーズの電報を打つよう勧めた。実際どのような経緯だったかは定かでないが、めでたく結婚の運びとなった。

後でぶーちゃんから決め手になったことを聞いた。学生時代、合宿で岩登りのトレーニングをしていたときどうしても足が届かない。彼女は小柄だった。そのとき小倉さんに「おれの肩に乗れ」と言われた。当時の登山靴は、靴底に鋏を

打ったナーゲルだ。躊躇ためらっている」と「バカヤロウ、早くしろ」と怒鳴られた。そのシーンが決め手になったそうだ。茂暉さんの決め手は、残念ながら聞き漏らした。

そうして、山岳部員同士の夫婦が2組となつて長い長い付き合いが始まる。ぶーちゃんの遠征は結婚後も、子どもができても続いて、彼女の輝かしい経歴になった。その陰には小倉さんのお母様の力が大きかった。優しいそのお姿は、今も私の目に残っている。

昭和50年代後半、女性の登山は普通のこととなり、年齢も広がる。朝日カルチャーセンターが董子さんに着目して、中年女性をターゲットとした登山教室を始めた。その延長線で「紫蘭会」というグループを結成、ネパール、スイスなどのトレッキングが始まった。おばさまたちに囲まれた当時のぶーちゃんは、本当に楽しそうだった。

大学山岳部女子部としての先駆け、渡航が普通ではなかった時代の遠征、また中年、女性、カルチャー、といった登山人生のキーワードを充分こなし、味わい尽くしてこの世を去った小倉董子さんに、心からの乾杯をささげたいと思う。

播磨アルプス

播磨アルプスは高砂・加古川の市境にある馬蹄型の連峰で、その主峰である高御位山は304mの低山だが、その端正な山容から「播磨富士」の別名を持ち、古くから信仰の山として親しまれてきた。

稜線上からは播磨平野や瀬戸内海が一望でき、樹木が少なく、快適な尾根歩きができる。岩尾根ではあるが鎖場やよじ登るような危



中塚山付近から見た播磨アルプスの全容。右が高御位山

関西支部 岩崎しのぶ

険な箇所はないので、初心者でもトライできる手ごろな山だ。また、稜線に向けて多くの登山道が伸びているので、時間やレベルに応じてコースが楽しめる。通年登れるが、稜線上は日陰が少ないので、夏場は避けた方がよい。また、岩が濡れているときは滑りやすいので注意したい。

【コースガイド】

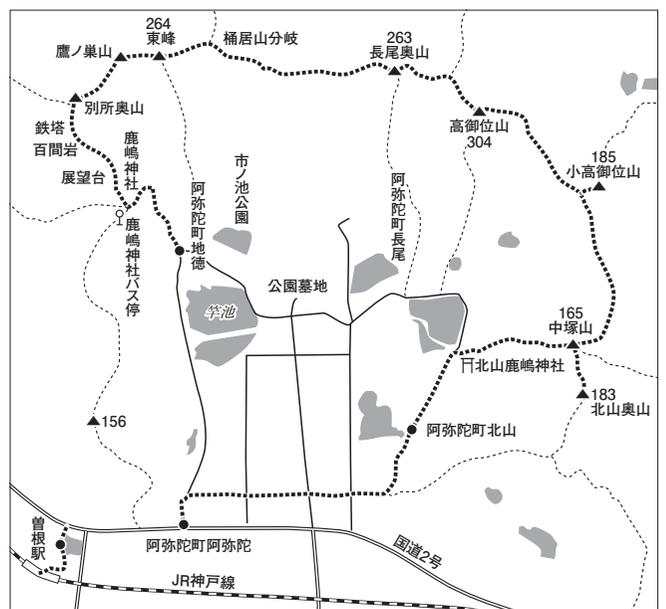
JR神戸線・曾根駅から国道2号を渡ると登山道に入れるが、今回は鹿嶋神社からのコースを紹介する。マイカーなら、神社の駐車場を利用すると良い。

曾根駅から神姫バスの鹿嶋神社行きに乗ると、約7分で神社に到着する。バスを降りると突然、銀色に輝く大鳥居が目に入る。チャン合金で造られた高さ26mの大鳥居で、耐用年数が1500年以上ということだ。本殿横に祀られている

「八秀稲荷大明神」の赤い鳥居をくぐり登山開始。標識に従って百間岩展望台へと歩く。5分ほど進むとコンクリートで固められた展望台に到着。ここから

は「百間岩」と呼ばれる急斜面の広い岩場が、頂上近くまで続く。ペンキ印を忠実に拾い登っていく。登り切り送電塔を越えると反射板の立つ別所奥山だ。ここから露岩帯の小ピークを越えて鷹ノ巣山へ。この山は2つのピークを持ち、東峰の道の真ん中に三角点がある(264m、四等三角点、点名「地徳」)。

少し前方に馬の背登山口への下山ルートが見下ろせるが、ここは直進しアップダウンを繰り返す。すぐに姫路市まで続く桶居山へのルートを見、高御座山方面へと前進する。この辺りは3月ごろならミツバツツジの奇麗な所だ。



稜線は平成23年1月の山火事で、百間岩から鷹ノ巣山、高御位山へと尾根上全体が消失、今もその名残が所々に感じられる。

さらに進み、南への下山道のある長尾奥山を越えると、高御位山の電波反射板が見えてくる。岩盤の道を越えると大きな岩の積み重なった高御位山に到着。山頂北側には高御位神社が祀られている。古代より神々の降り立つ場所として、信仰の対象となつている。三角点が高御位神社の拝殿外側南に

頭部のみ残し、下部は埋められている。よく探さないと見落としそうだ。三等三角点で、点名は「高御位」、標高は299・7m。実際の最高点はすぐそばの切り立った岩頭で304m。断崖の岩場からは小豆島、姫路城、明石海峡大橋など、大展望が広がる。ここは展望も良く、トイレも完備されており、昼食の場に最適だ。

ここから奥宮参道を下り、ペンキ印を目印に硬い岩盤を北山奥山方面へと下る。途中の小高御位山(185m)を往復し、さらに小さな起伏を繰り返し南下すると、鉄塔のある中塚山(165m)だ。そこから緩く南に下り、わずかに登



鉄線上の小高御位山付近から見た高砂市街と播磨灘

り返すと北山奥山(183m)だ。展望が開け、眼下には高砂の街並みが広がる。この地は竜山石の産地で、均質で強度と粘りがあり加工しやすいため、古墳時代の石棺や礎石、姫路城や明石城の石垣などにも使用された。

なお、この山の南方、宝殿山の山腹にある生石神社には、鹽竈神社の「四口の神釜」や霧島東神社の「天之逆針」と並ぶ日本三奇の一つ「石の宝殿」があり、巨大な石造物がご神体となっている。

中塚山の鉄塔に戻り、北山鹿島神社へと下る。ここから曾根駅までは30分ほど歩く。

【コースタイム】 鹿嶋神社(1時間)鷹ノ巣山(50分)高御位山(1時間)中塚山(30分)北山奥山往復(30分)北山鹿嶋神社(30分)曾根駅

【入・下山口へのアクセス】 JR東海道・山陽本線(神戸線)新快速で加古川駅へ。その先各駅停車で曾根駅へ。曾根駅〜鹿嶋神社は神姫バス 6072914214551

【参考文献・地図】

『日帰り山歩き関西(JTBパブリッシング)、国土地理院2万5000分の1地形図「加古川」

連載 ■ 当地アルプス登山案内 28
新龍アルプス

新龍アルプスは、合併してたつの市ができる前の龍野市と新宮町に位置する鶏籠山から祇園嶽まで連なり、磐崎ノ屏風岩から見える山容が、釈迦涅槃像に見える山々である。麓はかつて龍野藩五万三千石の城下町だった所で、「播磨の小京都」と言われ、多くの観光名所や旧跡がある。

コースは、低山でしかも登りも下りも急坂なので、登山は夏場と降雨時は避けた方がよい。

新龍アルプスを北端の祇園嶽まで縦走する場合、縦走後、麓で1泊し、翌日に鶴嘴山方面を登って釈迦涅槃像の山容を眺めた後、市内を観光するのがよい。

【コースガイド】

たつの市は童謡「赤とんぼ」の作者・三木露風の生誕地なので、本竜野駅西側出口を出ると、赤とんぼの碑がある。揖保川から水を引いている岩見用水に沿って進み、旭橋でこれから登る山々が見えてくる。揖保川を渡り、武家屋敷、白

関西支部 野村 康



鶴嘴山への登りから見た、釈迦涅槃像に見える新龍アルプス

壁の土蔵、町家造りの建物、淡口醤油発祥の旧醸造工場、洋館、三木露風生家などが残り、『男はつらいよ寅次郎夕焼け小焼け』のロケ地となった「播磨の小京都」を行き、昭和54(1979)年に復元された龍野城に着く。

左奥に登山口があり、いきなり急な坂を登ると尾根に出て、善竜寺からの道に合流する。龍野山城跡を見るため、龍野山城と紅葉で有名な紅葉谷との分岐を右の山城側へ行き、尾根をたどっていくと

500年前に築かれた山城の土塁跡、削平地跡、二の丸跡、矢竹の群生などを経て、本丸があった鶏籠山(218m)に着く。鶏の伏せ籠に似た山容から鶏籠山と名付けられている。

的場山に連なる尾根を進むと、大きな石灯籠のある両見坂(131m)で、紅葉谷からの登山道に合流する。ここからは、近畿自然歩道No.51「菖蒲谷へのみち」をたどるが、いきなりの急登となる。檜皮を産出する国有林を行き、的場山(394m)に着くと、山頂は鶏籠山と違って、南側の龍野エリアと揖保川の展望が開けている。

引き続き尾根をたどり、送電線「西播線」の鉄塔No.37を経て、三角点(383m)に到達する。新龍アルプス縦走はさらに続くが、釈迦涅槃像の山容を見るため鉄塔まで戻り、関電巡視路の急坂を栗栖川まで下る。

栗栖川に沿って北上し、興聖寺近くの橋で栗栖川を渡り、出雲街道に出て進む。凝灰岩が浸食作用によって削られて硬い安山岩が残り、まるで屏風を立てたように見える嵯崎ノ屏風岩を目指して進み、かつて「寝釈迦の渡し」があった嵯崎橋で揖保川を渡る。

揖保川沿いに上流へ行くと、断

崖に昔から「いぼ神さん」と敬われている舟型の光背を持つ5体の石仏が彫られている嵯崎磨崖仏と、さらに上流に彫られている4体の地藏尊を拝む。

鶴嘴山へは古宮天満神社の横から尾根まで登り、尾根をたどる。途中で新龍アルプスの山容が釈迦涅槃像に見えることが確認できる。さらに尾根を進むと、タイコ岩を経て鶴嘴山(263m)に着く。少し戻ってから急坂を下り、野森稲荷神社から東嵯崎駅まで向かう。

このコースの距離は13kmほどだが、累積標高差は650mあり、登りも下りも急で、アルプス縦走を充分堪能できる。



鉄塔巡視路の下りから見た鶴嘴山(中央左手)

【コースタイム】本竜野駅(30分) 龍野城(30分) 鶏籠山(10分) 両見坂石灯籠(45分) 的場山(1時間) 三角点383m(1時間5分) 栗栖川(55分) 嵯崎橋(5分) 嵯崎磨崖仏(30分) 嵯崎ノ屏風岩頂部(55分) 鶴嘴山(30分) 野森稲荷神社(25分) 東嵯崎駅

【入・下山口へのアクセス】電車だとJR姫路駅で姫新線に乗り換え、本竜野駅で下車。帰りは隣の駅の東嵯崎駅で乗車。車だと「山陽自動車道・龍野ICから北へ」「国道2号太子竜野バイパス・福田ランプから国道179号を北へ」「中国自動車道・山崎ICから国道179号を南へ」のいずれか。駐車場はたつの市観光協会「龍野遊歩」掲載の地図を参照。

【参考文献・山麓の見所】国土地理院2万5000分の1地形図「龍野」、越部古道継承会・新宮町教育委員会制作の標識「越部古道散策マップ」、別冊山と溪谷「関西ハイキング2015」、「山と溪谷」2023年3月号

観光案内は、たつの市HP、西播磨の山城HP、たつの市観光協会HP、姫新線利用促進・活性化同盟会HPなどを参照されたい。

東 西 北 南

N

S

エクアドル・チンボラソ登 山〔後編〕

石川千嘉

ようやくチンボラソ山頂へ

前日に5200m付近で登頂を断念して小屋に戻る。翌7日目、5200mまでの高地順応しかできておらず、若干不安ではあるが、いよいよ目標であったチンボラソ(6268m)を目指す。

車で入れる麓の小屋は4800mの標高にあり、サイクリングで来た人や、周辺をハイキングする人で大変なにぎわいを見せている。ひと休みして3時間ほど周辺を散策する。この標高に、ラクダの一種であるビクーニャが群れになって苔を食べに来ていた。しばらくしてそれまで厚いガスに覆われていたチンボラソが、突如として姿を見せたときは、その大きさと荘厳なたたずまいに驚き、畏敬の念

を抱いた。

翌日はハイキャンプ(5350m)への移動。小屋から1日で登る人もいるようだが、順応の問題を考えると2日に分けて登頂した方が良さだろうというのがエージェントの判断であり、それは私にとっては正解だった。ハイキャンプまではずっとガスに覆われ見晴しのない中ではあったが、途中までは火山の砂礫の路面、途中から雪と変化に富んだ道を行く。軽さと歩きやすさのために二重靴ではなく、アプローチシューズを履き、積雪の中をキックステップで進む。2時間ほどで、大きなドームテントの建てられたハイキャンプに到着する。

急にガスが抜けて視界が開け、それはすばらしい光景が眼前に広がる。赤道直下で、ほぼ真西に沈む太陽を見ながら、心から幸せを感じる。温かくおいしい食事が供

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)



太平洋まで見渡せそうな雪原を登る

され、翌日の本番のためにゆつくり休むことにする。

そして9日目、いよいよ本番である。深夜12時出発ということになり、11時に起床して装備をチェックした後、温かいお茶を飲んで体を目覚めさせる。標高5000mオーバーとはいえ赤道直下故に、それほど寒さは感じないが、下は3レイヤーで二重靴を履き、ガイドとロープを結ぶ。出発して5500m過ぎくらいまではあまりにも楽しく、このままずっと歩いていたい、と思える状況だった。しかし稜線に出てから風が強まり、ダウンとウインドジャケットを着てちようど良い。ピッケルを持つ手が

かじかみ、時計を見る余裕もなく、ただ時間の過ぎるのを祈りながら歩を進める。

ペースはゆつくりだったため息も上がらず、頭痛や腹痛といった高山病の気も全くなかったが、寒さがつらい。耐えながら進んでいると、間もなく空が白み始め、山頂が眼前に現れた。すぐ目の前に見えていながらなかなか近づかないもどかしさを感じながら登っていくと、広々とした山頂に出た。が、最高地点はもう少し向こうに見える小高い所ということで、もうひと踏ん張り。ついに、登頂となった。その最初の印象は、「神様のお庭」であった。

ガイドに「おめでどう」と言われ、やっと山頂に着いたことを実感する。太平洋まで見渡せそうな雄大な風景の中、アンデスの風がほほをなでた。

帰還、そして……

麓の小屋からハイキャンプまでが2時間、キャンプから山頂までが6時間半であったが、距離は短いため下山は3時間半と、短時間だった。小屋まで戻ると、途中敗退した人たちが祝つてくれる。実

感もあまりわからないなか、ひと休みして車に乗り込み、翌日は保養地パニヨスで滝などを見学して日本へと戻った。

もう高山はこれでいい、と山頂で思ったにもかかわらず、帰国して間もなく、さらに高い所へ行ってみたくなった。会社の許可を取り付け、今回エクアドルでお願い

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

東京多摩支部 東京新支部はなぜ必要か

2021年のJAC総会において、私は東京新支部を作ることをご提案した。古野会長は前向きに検討することだった。しかし、2022年の総会資料では全く触れられていなかった。私の質問に対し、古野会長は問題がいろいろあるとの回答だった。それでも8月に改革事業推進委員会が発足し、1回目の会議が開催された。

したエージェンツに再度連絡を入れ、2月にアコンカグアに行くことにした。神様のお庭をもう一度見てみたい。

今回の登山に関し、日本山岳会の川瀬恵一さんと、個人的な友人である野原成祐君には大変お世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

だより

そのトップの課題として、東京新支部構想が挙げられ、学生部・青年部・WV部の新支部への移行による活性化が期待されること、

ロードマップでは今年度中に目途をつけることなどが示されていた。しかし、その後、委員会が開催されず、理事会の議事録を見ても継続的に討議された様子はない。なぜ進展しないのだろうか？ 新支部の必要性について改めて考えてみたい。

JACには全国33支部があり、



支部登山教室は会員増に寄与する

支部が活動主体になっている。東京には東京多摩支部があるが、主にカバーする地域は東京西部である。東京東部、主に都区内の会員は、所属する地域の支部がない。現在、支部無所属会員は都区内で500人、首都圏で1000人だ。以前は入会同期会の設立が奨励され、同期会は多くの会員にとつて止まり木になっていた。しかし、今は同期会は設立されていない。支部無所属会員は止まり木のない状態である。ルームのある日本の中枢地域に穴が開いたように支部がない。全国組織として統一性を欠いているといえる。

本部資料では、支部所属会員の

方が、無所属会員よりも退会率が少なかったという。支部員は支部から様々な恩恵が与えられ、支部山行などで人間関係が築かれる。これらは、会員増加や退会率の低下に寄与していることは疑いない。12月の支部連絡会議では支部活動がいかに関行的に行なわれているか、会員獲得に努力しているか、熱い情報が飛び交い、鼓舞された者も多かっただろう。しかし、このような情報が、都区内の多くの会員に持ち帰られることはない。また、支部単位で種々の活動、例えば、全国支部懇談会や登山教室指導者養成講習会などが行なわれているが、無所属の会員は、この事業に参加できない。これらの会が盛大に開催されても、日本の中心部からの参加者を欠いていることを思うと虚しく、残念な気がする。

他方、これらの支部事業に対して、本部は費用を負担している。会員は支部所属の有無にかかわらず、同じように会費を納入している。しかし、無所属会員は支部会員と同様な恩恵を受けられず、組織としてサービスが中途半端と言わざるを得ない。

東京東部に支部がないことの理由はいくつかあるようだ。例えば、支部の会合でルームが無料で使えるのは不公平という声があるようだが、枝葉末節なことに思われ、新支部設立の妨げになるような重要事項と思えない。また、委員会や同好会活動があるので、それで十分という考えもあるようだ。しかし、趣味に基づいた集団と、地域単位の支部とでは、おのずから役割は異なる。なお、仄聞そくわんしたところ、山行委員会は委員の高齢化であと数年で山行を企画できなくなるといふ。東京多摩支部では、山行などで親しくなった者を委員に勧誘している。このように、日常的に接する機会があることが、委員の増加に役立っている。支部の存在は同好会活動を補完し、持続可能なものとするだろう。

2022年の総会で南久松財務担当理事は、このまま会員減少が続けばあと10年で日本山岳会は財政的に破綻する、と述べた。会員増加を喫緊の課題として把握する問題意識を共有することが必要である。若い人口が多く、大栗田である東京に新支部を設立することは会員獲得、会の活性化と存続へ

とつながるだろう。東京新支部の設立が、危機的状況を突破させる可能性があると考えられる次第である。
(東京多摩支部長 野口いづみ)

宮崎支部

ヒメボタルの飛び交う森

1年間お世話になったお礼と称し、あるいは運動すればその日の夕刻に行なう支部晩餐会で旨い酒が飲めるという理由もあって、支部設立(1985年)以来、毎年12月に宮崎市近郊にある、双石山の忘年清掃登山を行なっている。

双石山登山道周辺は、登山者のマナーが良く、ゴミはほとんどな



双石山登山口駐車場脇での参加者

いが、登山口駐車場脇の林の中には登山者が捨てたというより、いわゆる不法投棄と思われる大量のゴミがある。これを看過できないとして当支部の自然保護委員会委員長・前原会員がリーダーとなり、2014年からは登山道のみでなく小谷登山口周辺、九平登山口に至る県道27号脇のゴミ回収を続けてきた。

20年からは宮崎市内の山の会9団体からなる宮崎市山岳協会にも呼び掛け、共同で取り組んでいる。これに学生ボランティアなども加わり、1回の清掃の参加者数は30〜50名である。回収されるゴミの量は、45ℓビニール袋100袋以上、これに冷蔵庫・洗濯機・タイヤなどの粗大ゴミも加わる。回収したゴミは市環境課・県土木事務所が撤収する。

9年間にわたりゴミを回収した効果かどうか明確ではないが、今までほとんど姿を見せなかったヒメボタルが3年ほど前から飛び交うようになった。また、一度奇麗に片つけた領域には不法投棄ゴミの量も少なくなり、この清掃作業の効果が大きいことを実感している。しかし、まだ広い範囲のゴミ

の回収は手つかずの状態なので、さらに広く呼び掛け、協力者を増やしていきたい。一方、行政(市や県)にも何度か不法投棄、ゴミの問題を報告し対応策を講じてもらえよう働き掛けているが、今後もしっかり強く要望していく考えである。

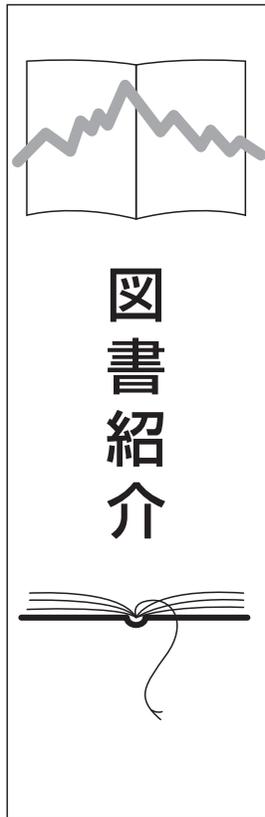
ヒメボタルは、ゲンジボタルやヘイケボタルとは異なり、幼虫は陸生でカタツムリなどの陸生貝を食べる。落ち葉の下に産卵された卵は約1ヶ月で孵化し、1年ないしは2年で成虫になることから、ヒメボタルの生息には森林内環境が極めて重要と言われる。この活動の効果でヒメボタルが

復活したことをアピールし、ヒメポタルが飛ぶ時期に観察会などを開催して、環境保全の大切さを理解していただくように働き掛ける計画である。特に子どもたちに自然保護の大切さを学ばせる場とし

て、またボランティア活動として参加してくれる学生たちへ、山に対する興味を持たせる場として活用できれば幸いである。

(宮崎支部長 荒武八起)

図書紹介



エベレストの空

上田優紀著



2022年7月
光文社
新書判
1400円+税

1988年生まれの若きネイチャー・フォトグラファーのデビュー本である。表題からは紺碧の空にそびえる世界最高峰を年月をかけ、あらゆる角度から撮影した山岳写真家のごっつい写真集かと思っていたら、肩透かしをくらった。細長いスリムな新書判(105mm

×173mm)のカバーには、写実的な肖像画の本人がカメラを首からぶら下げて空を眺めている。そこには若くてもてそうな青年の姿がある。本書には登頂に至るまでの過程が写真とエッセイ風に綴られ、登頂ガイド本のようにもあるが、何よりも2021年、コロナ蔓延の中で登頂にこぎつけたその行動力にはだれもが興味を引かれるに違いない。

24歳で世界一周の旅に出かけ45ヶ国を放浪、その後はフリーランスとして好奇心のおもむくままに世界の極地、僻地を独りでテントを担ぎ、美しい自然を求めて水平

的に歩きながら撮影を続けてきた。そんな著者が8000mを登り続けている写真家の一言で水平から垂直への旅にガラリとスイッチが切り替わった。「上田君は登らないの？ 君なら登れると思うよ」。

2018年、ヒマラヤ登山への挑戦はアマ・ダブラム(6812m)から始まった。高所順応に苦しみ、肋骨を折りながらも登頂。满身創痍であったが、目前にそびえ立つエベレストに心を奪われる。そして、その瞬間から世界最高峰への計画がスタートすることになる。

アマ・ダブラムの次に選んだのはマナスル(8163m)である。トレーニング、資金集めに明け暮れながらも2019年に登頂を果たす。そして翌年、早くも念願のエベレスト挑戦となるが、コロナパンデミックに襲われ無情にも出発1ヶ月前に遠征は中止となる。

著者は登山に集中するあまり、ここ2年ほどは写真家としての作品が撮れていなかった。焦りの中で来年には、いやその次には行けるかもしれないと現地エージェントとの頻繁な折衝、資金集めにと奔走する日々が続くが捲土重来、21年春、受け入れOKとの連絡が入

り、今しかチャンスはないと出国を決断する。11日後にはBCに入るが、なんとここまでもコロナが蔓延しているという異常な環境での登山開始となった。

高所順応を終え、いよいよ最終キャンプC4(7900m)からサミット・プッシュに挑む。デスゾーンを潜り抜けると、エベレストは苦難を乗り越えてきた若者に千載一遇の登頂チャンスを与えてくれたのである。

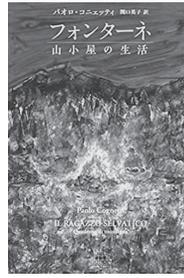
本書の大部分はエベレスト登頂までの苦勞と熱い思いが素直に書かれているが、そこに至るまでのアマ・ダブラムとマナスルの登山についてもつと書いて欲しかった。特にマナスルは登頂のみの記述であり、物足りなさはそれが抜けていたゆえかもしれない。

ヒマラヤに登りたいけど……といろいろな理由をつけて行けない人々には、うらやましい行動力と覚悟を持った若い登山家と映るだろう。しかしながら、彼は写真家である。登山中にカメラが壊れても登り続けるか？ の問いに、「ノーだ。本当にそうなら下山する。写真を撮って人に伝える。これが登る理由だ。カメラなしに命

の危険がある場所には1秒だって
いる意味がない」と答えている。
若きネイチャー・フォトグラフ
アーの今後の山と写真に期待した
い。
(松田宏也)

パオロ・コニエッティ著
関口英子訳

フォンターネ 山小屋の生活



2022年2月
新潮社 176頁
四六判 1800円+税

都会生活に疲れ、何もかも枯渇
してしまったイタリア人作家によ
る山籠もり生活の体験録。

著者パオロ・コニエッティは1
978年ミラノ生まれ。短編小説
で作家としてデビューし、201
6年、山を舞台に2人の男の友情
を描いた長編小説『帰れない山』が
世界的ベストセラーになった。本
書はその3年前に書かれた作品で、
『帰れない山』を生み出す原点とな
った山小屋生活の体験を綴ったも
の。

著者は大都会のミラノ生まれだ

が、20歳まで夏をアルプスのモン
テ・ローザ山麓で家族と過ごし、
登山に親しんできた。著者にとつ
て山は自由の象徴であり、野生の
少年だったころの自分がいる場所
であった。経験したことのない虚
無感から脱するため、幼少期を過
ごした渓谷にほど近い、フォンタ
ーネという集落で山小屋生活を始
める。

春の訪れとともに始まった山小
屋生活の初日、著者は樹脂の香り
を通じて山に戻ってきたことを実
感する。夜は沢の水に霜の味を感
じ、「耳が痛くなるほどの深い静
寂」に子どもころのように怯え
る。歴史ある山小屋の石の壁に触
り「いったいいくつの手がこの壁
を撫で、どれほどのストーブの煙
や家畜の息、ポレンタやミルクの
湯気を吸ってきたのだろう」と想
像する。繊細な感性と豊かな表現
力により、読み始めると五感が刺
激され、たちまちフォンターネの
世界に引き込まれていく。

社会規範や人間関係から解放さ
れ、自然の中で体を使った作業を
し、野生動物との交感ができるよ
うになっても孤独にだけは慣れる
ことはなかった。そんな著者の心

図書受入報告(2022年12月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
羽根田治	山のリスクとどう向き合うか(平凡社新書)	247p/18cm	平凡社	2023	出版社寄贈
小泉武栄	日本の自然風景 ワンダーランド:地形・地質・植生の謎を解く	304p/21cm	ベレ出版	2022	出版社寄贈
神戸外国人居留地研究会(編)	近代神戸の群像:居留地の街から	370p/21cm	神戸新聞総合出版センター	2023	出版社寄贈
菅原信夫	続続 丹沢 山紀行	187p/21cm	白山書房	2023	出版社寄贈
山崎幸和	高倉宮以仁王伝説の会津と越後の山々:京から越後への逃亡路をたどる	294p/21cm	新潟日報メディアネット	2022	著者寄贈
福島県立白河高等学校(編)	星六つ:白河高等学校山岳部甲子山遭難・ヒンデュークシュ遭難記録	116p/27cm	福島県立白河高等学校	2022	発行者寄贈
前田英昭	山想録	234p/21cm	前田英昭(私家版)	2022	著者寄贈
藤田弘基(写真)	THE HIMALAYAS(写真集):ネパール・ヒマラヤの高峰	/50cm	ぎょうせい	1980	大谷セツ子氏寄贈
藤田弘基(写真)	THE KARAKORUM(写真集):パキスタンの高峰	215p/49cm	ぎょうせい	1990	大谷セツ子氏寄贈
第6回「山の日」全国大会実行委員会(編)	第6回「山の日」全国大会やまがた2022大会報告書(2022年8月10-11日)	55P/30cm	第6回「山の日」全国大会実行委員会	2023	発行者寄贈

を暖めたのは、山小屋主のレミー
ジョや荒々しい山男ガブリエー
たちとの、かけがえのない友情だ
った。レミージョとの山の散策や
ガブリエーの昔語りを通じて、
幼少期の記憶の断片をたぐり、失
われつつあるアルプス山麓の山
民の暮らしを見つめていく。

また、雨が降り続く夏や雪の日
の山小屋で著者の魂を導き、心を
潤したのは先人たちの言葉だった。
ヘンリー・デイヴィッド・ソロー
の『森の生活 ウォルデン』、アン
トニア・ポッツィの瑞々しい詩や
マリオ・リゴニ・ステルンなど、
敬愛するアメリカやイタリア文学
などから言葉が引用され、山での
生活に香気を与えている。秋の牧
下りのころには、フォンターネで
過ごした日々によって再び文章が
綴れるまでに回復していく。

（井上優美）

山野井泰史著

CHRONICLE クロ
ニクル山野井泰史全記録



2022年8月 256頁
山と溪谷社判 A5判 2000円＋税

2021年にピオレドール生涯
功労賞を受賞し、登山史に残る最
高のアルピニストとして名実とも
に認められた山野井泰史。映画『人
生クライマー 山野井泰史と垂直
の世界』をご覧になられた方は、そ
の純粋な生き方や穏やかな日常の
生活に心を惹かれた方も少なくあ
るまい。

『ソロ 単独登攀者 山野井泰史』
（丸山直樹）や『凍』（沢木耕太郎）、
山野井自身の筆による『垂直の記
憶』等々、彼に関する書物はいくつ
かあり、そのいずれもがすばらし
い作品だが、本書はこれまで山岳
雑誌等に発表された本人の手記や
インタビューを豊富な写真とで編
み、40年に及ぶその足跡を振り返
る上で最良の一冊となっている。

とりわけうれしいのは、山野井
が22歳という若さで『岩と雪』に寄

稿した1年5ヶ月に及ぶアメリカ
（ヨーロッパ、クライミング放浪
の手記や、クライマーとしてのそ
の存在に一目も二目も置かせるこ
とになったバフィン島トール西壁
の単独登攀記といった、今となつ
ては実に貴重な、若き山野井泰史
の“肉声”に触られることである。
30代後半で著された『垂直の記憶』
がやや抑えた語り口であるのに比
して、「天国に一番近い男」などと
評されていたこのころの文章には、
登りたいという熱情がほとぼしり、
えも言われぬ魅力がある。

それにしても本書を閲覧して改
めて感じ入るのは、山野井泰史が
積み重ねてきた登攀の、その質と
量のあまりの膨大さである。しか
も彼はその多くを困難で危険度の
高いソロというスタイルで為し、
何より生きて還り続けてきたので
ある。山野井には2002年のギ
ャチュン・カン北壁で、手足の指
10本を切断するという、クライマ
ーにとって致命的とも思えるよう
な大きな転機があった。もし彼が
あそこで指を失わなかったら、そ
の後どんな山におもむき、どのよう
な足跡をたどったことだろうか？
一つ言えるのは、指を失い、年

齢を重ねても、山野井は山野井泰
史であり続けたということだ。彼
がギャチュン・カンまでに成し遂

「会員優待サービス」変更のお
知らせ 〈会員サービスWG〉

会報1月号に同封した一覽表
の中で、その後、以下のような変
更点がありましたので、ご留意く
ださい。

*【東北北部】奥の湯・森吉山荘
／休業中

*【東北南部】雲母温泉・雲母本
館／休業中 川入民宿・村杉
荘／削除

*【上信越】四万ゆずりは荘／休
業中

*【関東】奥秩父・大弛小屋②
0553-22-1111に変更

*【北アルプス】らいちよう温泉・
雷鳥荘①076-463-1

664に変更 太郎平小屋ほ
か①076-482-141

8に変更 烏帽子小屋①0
261-22-5768に変更

酒沢ヒュッテ①0263
-26-3212に変更 酒沢小
屋①050-3730-92

48を削除

*【御嶽山】御嶽山・たかの湯
閉館

*【九州】九重・法華院温泉高原
テラス／営業終了

げた記録だけでも世界的アルピニストとしての評価を得るに十二分なものだが、クライマーとして大きなハンデを背負ったその後の20年の登攀の履歴には、山野井泰史の真価や、クライマーとしての本

質が、より鮮やかに刻まれているように私には感じられる。彼は今も登り続け、その場所は常人には到達し得ない高みであることを、この偉大なクロニクルは教えてくれる。
(松原尚之)



■1月の理事会は休会でした

ルーム目誌 10月

- 10日 フォトクラブ
- 11日 財務委員会 山行委員会
- 12日 YOUTH CLUB みちのり山の会
- 13日 図書委員会
- 16日 総務委員会 資料映像委員会
- 17日 バックカントリークラブ
- 18日 つくも会 三水会 マウンテンカルチャークラブ かっぱの会
- 19日 学生部 山岳古道PT

- 20日 自然保護委員会 フォトクラブ
 - 21日 アルピニズムクラブ
 - 23日 会報編集委員会 資料映像委員会
 - 24日 00会 平日クラブ
 - 25日 子どもと登山委員会 麗山会
 - 26日 記念事業委員会 山遊会
 - 27日 記念事業委員会 1月来室者 150名
- 会員異動**
- 森 元一 (4661) 23・1・22
- 石原國利 (5180) 23・1・29

- 熊田宗次 (5222) 22・10・22
 - 白川義員 (6345) 22・4・5
 - 中名生正昭 (7214) 23・1・8
 - 濱地克郎 (9455) 22・11・21
 - 森 修作 (11717) 23・1・11
 - 大和田秀穂 (15004) 22・11・18
- 退会**
- 辻 章行 (10193) 東海
 - 海発泰子 (14543) 越後
 - 村越 稔 (14832) 東海

I N F O R M A T I O N

インフォメーション

◆高尾山薬王院・佐藤貫首の講演会のご案内

東京多摩支部 高尾山薬王院では2020年12月に27年ぶりに貫首が交代し、十三世貫首に佐藤秀仁氏が就任された。佐藤貫首は90年に高尾山薬王院に入山。山伏修行に邁進され、真言宗智山派の僧侶では初の大峯山奥駈修行大先達の称号を与えられた。今回は修験の話を中心に語っていた。

日時 3月25日(土)14時開始(受付開始13時30分)

会場 国分寺市立cocoobun jiプラザ リオンホール (国分寺駅北口WESTビル5階)

定員 150名

申込み方法 東京多摩支部 HPの申込みフォームから登録かメールにて。メールの場合、氏名(会員番号)、メールアドレス、電話番号を記

油井孝夫 (16364) 東海

数藤圭二郎 (16655) 四国

*2022年4月8日付けで退会届けを受理した小川幸恵(6626)様(山)2022年5月号18ページ、会員異動退会欄に掲載は、本人より退会撤回の申し出があり、これを認めることとしました。
(総務担当常務理事 柏澄子)

入し、総務委員会 (soumu.tama.yama@gmail.com) へ
送付。3月10日締切り。

問合せ 総務委員会 ☒ soumu.tama.yama@gmail.com

◆第11回小島烏水祭のご案内

主催 本部、主管 四国支部
期日 4月8日(土)～9日(日)
内容 8日講演(古野淳会長「百年登山を目指して」)および
碑前祭(13～15時)、喜代美
山荘花樹海で夕食懇親会

9日「高知市五台山にある
高知県立牧野富太郎植物園
を見学(午前中)

参加費 碑前祭は無料、夕食懇親
会は8000円(予定)、宿
泊費は別。

予約・問合せ 四国支部skk@jac.
or.jpか、小島烏水祭担当役
員・向井 ☎090-9555
4-61993へ

*高知への移動は相談に応じます
(春のNHK朝ドラのモチ
ーフは、高知出身の植物学
者で元日本山岳会会員牧野
富太郎のため)。

*コロナ禍のため、内容は変更する
可能性があります。ご了承ください。

◆山の自然学講座2023

山の自然学クラブ

「山の自然学講座2023」では、
全10回(室内(座学)/オンライン)
講座5回と現地(屋外)講座5回で
山と自然の成り立ちについて講義
します(HPに申込みフォームが
あります。また、講座内容もご確
認ください)。 [http://www.shizen.
or.jp/basic/](http://www.shizen.or.jp/basic/)。

日程 3月12日～6月17日(全10
回)

主催 特定非営利活動法人山の自
然学クラブ 〒160-0
015新宿区大京町25高
橋ビル402 緑化工ラボ
内 ☎03-3341-139
53 Fax 03-53362
17459 ☒ shizengaku@
shizen.or.jp (担当中村)

定員 各回30名程度

参加費 全10回申込み≒3万円

(当会/後援団体会員・学
生は2万5000円) 室
内・オンライン講座全5回
申込み≒1万5000円
(各員区分なし) 各講座へ
参加≒3500円(1講座
当会/後援団体会員・学

生は3000円)

*現地講座についてはこのほかに
交通費・入園料など実費が必要。
本講座に1回以上参加した方は当
年中、当会が実施する行事・講座
に会員価格でご参加いただけます。
*全10回を通して受講お申込みの
方には前年度の会報を1部差し上
げます。また最終回の講座終了後
に、受講修了証をお渡しします。

【室内講座】全5回

第1回≒3月12日(日)小泉武栄先生

第2回≒3月28日(火)紺屋

恵子先生 第3回≒4月18

日(火)下野綾子先生 第4回

≒5月13日(土)柿崎喜宏先生

第5回≒6月17日(土)増澤

直先生

【現地講座】(日帰り)全5回

開催地付近の現地集合/現地解散。

各回10～15時くらい。

第1回≒3月25日(土)小泉武栄先生

第2回≒4月8日(土)石井

誠治先生 第3回≒4月22

日(土)多田多恵子先生 第4

回≒5月20日(土)増澤直先生

第5回≒6月10日(土)小泉

武栄先生

◆編集後記◆

●2月6日、兵庫県豊岡市が主催
する第27回「植村直己冒険賞」の記
者発表がありました。2022年
の受賞者は、昨年の『山岳』に「北
海道分水嶺を単独縦断」と題して、そ
の記録が掲載された野村良太さん
でした。国内の冒険が授賞対象と
なったのは今回が初めてでして、
「歩き尽くされている」と思った国
内でも、こんな冒険ができる可能
性があったのかと、審査員の先生
方も驚いておられました。

●野村さんは北海道大学WV部出
身の28歳、誠実さと謙虚さを感じ
られる好青年でした。早速、本会
の北海道支部に入られ、初めてヒ
マラヤにも挑戦されるとか。今後
の活躍を大いに期待したいもの
です。記者会見の様子は、次号で報
告いたします。(節田重節)

日本山岳会報 山 933号

2023年(令和5年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
E-メール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社